

韓屋（ハノク）とは、伝統的な朝鮮の建築様式を継承した従来型家屋の、大韓民国における呼び名である。これに対して現代の様式で立てられた家を洋屋（ヤンオク）と呼ぶこともある。自然との関係性で見ると、通常は山を背にして、前は水と向き合うように南向きで建てる、「背山臨水」という風水の原則に従った配置が守られる。そして、日本でもたまに経験することだが、建て主の四柱推命や職業、持病などに従って、建築家が任意に調整する場合もあるという。

伝統的なハノクでは、寒い冬はオンドルで床を暖め、夏は板の間で涼しく過ごすことができる。紙の国で発達した紙の床仕上げや、朝鮮独特の棧で割り付けられた障子は、室内環境の制御シテムと相まって、とても住み手にやさしい。床座の伝統を守る朝鮮では、その目線で窓台や開口部の高さが決められる。いまだに根強い人気があるこの住居様式を、宿泊施設に全面的に採用して慶州市に新築されたホテル、羅宮（ラグン）^{*1}に泊まる機会があつ



写真84-1 移設保存されたハノク



写真84-3 羅宮の客室中庭



写真84-4 羅宮の客室



写真84-2 平瓦積み の壁面

た。新進気鋭の建築家チョウ・チョング^{*2}によるものだが、大規模ながら破たんのない出来栄えに大変感心したことを覚えている。スイートのような家族用の大部屋は、中央に石張りの露天風呂が鎮座する中庭の三方を囲むように、寝室居間、水回りが配されている。日本の伝統的木造建築との違いは、垂木を含めた太めの構造部材が醸し出す重量感であり、木建具の大雑把さであると思った。家具もそうだが、ディテールや収まりにそれほどこだわらるわけではない、そんな少しの鷹揚さが、逆に暮らしの機微をどんと引き受けてくれそうである。

オリンピックを機に、ソウルは高層住宅の林立する大都市に変貌した。その中に残存するハノクの伝統は、このように現代のリゾートに生かされる時代を迎えたのである。

*1 羅宮慶州
(Millennium Place
Resort & Spa内のホ
テル)

*2
Cho Jeong-gu
(1967-) : Guga
Urban Architects
Atelierを主宰する韓
国の建築家